甦りに由てキリストの神の子たることを確信せるパウロは更にキリストを以て神人和合の媒と視たのである。キリストが神に祭られて神の怒は人に及ぬに至た　玆に人は光明を認め、新天新地の春に逢ふ事が出來た。

内村鑑三氏はロマ書三ノ廿一―卅一を以て「聖書の鍵」として居る、曰く舊約は新約を以て解すべし新約はロマ書を以て解すべしロマ書はその三ノ廿一より卅一までを以て解すべしとこれ大に味ふべき語である。

パウロの觀たるキリストは實に活ける神の子に相應しき資格を有するものにして、彼が之に對して夢寐の間にも尙ほ且つ奉仕の念已む能なかつたのは決して偶然のことではないのである。

彼（キリスト）は萬物の上に在りて世々讃美を得べき神也アーメン。（九ノ五）

と叫ぶも無理ならぬことである。

余は多年の間ロマ書を研究して眞實パウロの精神に勵まされ、慰められ、力づけられ、信仰生活を營むことを得て居る。而してパウロの大精神は復活せるキリストに集注せるにあることを發見して、壯快禁ずる能はざるものである。余は唯々滿身の精力を傾けてパウロの心を知り、遂に甦れる主キリストを得て之を間接に直接に日々の生活に應用せんことを求めて止まないのである。草木の始めて生ずるや天に向て發する。其衰ふるや地に向つて倒れる。人の世に出るや誰か衝天の英氣を有ざるものぞ、大丈夫まさに天に葬むらるべしである、地に葬むられてはならぬ。人生は希望に活きよ、希望は未來に屬するもの未來なきものは生活のないものである。甦れるキリストを仰ぎ見よ。義人たれ、而して救はれよ。

八、キスリトと偕なる生活

余は善く羅馬書を反覆玩味して我が衷に得る所愈々深く、今やパウロが主キリストに冠した言葉即ち七個の前置詞を發見して不尠興味を覺えた。今之を左に記述して羅馬書愛讀者諸君に頒ちたいと思ふ。

第一、「キリストと偕に」（原語にて「スン」と云ふ）此前置詞は福音書には非常に多く用

ひられて居る、而してその意味も頗る深長な文字である、馬可は之を五回、約翰は三回用ひて居る。此の外約翰は「メタ」といふ原語を數回用ひて居る。此の「スン」と云ふ字と「メタ」といふ字とは同じく偕にといふ意味なれども、セーヤ博士の説明によれば、前者は後者よりも一層親密を意味するとのことである。路加には「スン」を七十九回用ひて居るが、パウロは三十九回程之を用ひて居る、今羅馬書によりて之を見れば、

(1)「キリストと偕に死なば彼と偕に生きん事を信ず」（六ノ八）

(2)「彼と同に葬らるゝは……我儕も新しき生命に行むべき爲なり」（六ノ四）

(3)「我儕の舊き人は彼と同に十字架に釘けらる」（六ノ六）

(4)「彼と偕に苦を受けなば彼と偕に榮をも受くべし」（八ノ十七）

「偕に」又は「同に」といふ文字は何れもキリストとの親交を意味し、キリストと死生を一にすることである、羅馬書八ノ廿六には「聖靈も亦我儕の荏弱を助く」と譯してあるが、此の助くと云ふ言葉は原語にては三個の文字より成立つて居る、即ち「スン、アンテイ、ランバノー」、「スン、アンテイ」とは我儕に代り、或は我儕の傍に在りてと云ふやうな意味

で、次に「ランバノー」には執りて扶くと云ふ樣な強い意味が含まれて居る。斯く我等が荏弱なるが故に進退の自由を缺くのであるが、聖靈は我等と偕なり、我等の傍に在まし、我等の手を執りて我等を助け給ふのである。之を考ふる時に我等自身が荏弱なる際にも、尚ほ心に恃む所がありて心強く感ずるのである。「我弱き時に強ければ也」とパウロの云つたのは即ち是である。

使徒等は己を迫害する者の前に立ちて堂々とキリストの道を宣傳して云つた「此外別に救あることなし蓋天下の人の中に我儕の依り頼みて救はるべき他の名を賜はらざれば也」と、これを聽ける人々は斯くペテロとヨハネとの大膽なるを見て其無學の小民なるを識れば之を奇んだのである。然れども人々は暫くにして使徒等のかく大膽勇猛なるはイエスと偕に在るが爲であることを知るに至つた。

孔子と偕に在る者は孔子の如くなり、釋迦と偕に在る者は釋迦の如くなる、使徒達がイエスと偕に在りてイエスの如くなりたるは疑ふべくもあらず、孔子家語に「善人と居らば芝蘭の室に入るが如し、久うして其香を聞かず、即ち之と化す」と云へるは即ち之を云ふ

のである。

第二、「イエス・キリストに在る者」

「在る」といふ文字は原語にて「エン」とある。故に原文を直譯すれば「キリストの中に在る云々」、となるのである、「キリストの中に在り」との一句には千萬無量の意味が含まれて居る。而して「在る」といへる文字は第八章に三度使用されてある。

即ち八ノ一「イエス・キリストに在る者」同二「キリストに由りて」、同卅八「イエス・キリストに賴る」、是である。邦語譯は何れも別種の文字を用ひてある、が原語では凡て「エン」と云ふ文字である。鳥が空氣の中に在りて飛翔し、魚が水中に在りて游泳し、樹木が土中に深く根を張りて成長する如く、我等の生命も亦、唯主イエス・キリストの中に在りてのみ安全堅固なるを得、又成長發達し得るのである、故に我儕は須くキリストの中に在る事を努めねばならぬ、パウロの「我儕は彼に賴りて生き」と云へる言も原語では矢張「彼の中に在りて」と云ふ意味である。

余は嘗てアラビヤの沙漠を橫斷せる旅行者が、突然「サイムーン」と稱する怖しい毒風に

襲はれた話を聽いた事がある。サイムーンが一度來襲するや、紫の靄が四邊に塞がるのであるが、之を呼吸する者は即座に死ぬるのである、故に沙漠旅行中「サイムーン」と云ふ叫聲が聞えると、旅行者は悉く駱駝から飛び下りて地上に伏し、其の毒風の過ぐるを待つといふ事である。然しながら人間社會にも怖るべき「サイムーン」が屢々吹き荒む事がある、斯かる場合我等は唯主イエス・キリストの中に在りて自ら守る外に道はない、「夫れ汝等は死にし者にて其命はキリストと偕に神の中に藏れ在るなり」(哥羅西三ノ三)

第三、「キリストに賴りて」

此の前置詞は、キリストは生命に入るの道であり、又門であることを示すのである、即ち

(1)キリストを通して神と和ぐ、

(2)彼を通して恩寵の座に近づく、

(3)彼を通して歡喜を得、

(4)彼を通して希望と光明とを有つ、

(5)彼を通して生命を得、
(6)彼に頼りて勝利を占む、

「頼りて」と云ふ文字何百あるか擧げて數へることが出來ず、キリストを措いて何處にも生命を獲得する事は出來ない。パウロ曰く「然れども我儕を愛する者(キリスト)に頼りて凡て此等の事に勝ち得て餘あり」と。キリストに頼りて得る勝利は勝ち得て餘ある勝利である。「我は途也、眞也、生命也、人若し我に由らざれば父の所に往くこと能はず」(約十四ノ六)

第四「其名の爲に」(一ノ五)

パウロの傳道の動機は終始「主イエス・キリストの名の爲」より外にないのである、キリストの徒弟たるものは誰も斯くあるべきである、使徒行傳十五ノ廿六に「此二人は我儕の主イエス・キリストの名の爲に其生命を愛まざりし者也」とあり、又羅馬書十六ノ四には「わが命の爲に頭を劍の下に置けり」とある。以上の引照は何れも、キリストの爲、又はパウロの爲に其一身を献げて、何物をも惜まざりし眞正のキリストの徒たる二人の勇士と武裝せる婦人との意氣精神を示すものである。キリストの爲、パウロの爲には自分の一身

を捨てゝも盡したと云ふ精神に到つては、千載不滅「身の爲に君を思ふは二心、君の爲には身をも思はじ」といふものである。

第五、「『イエス・キリストに合はんとて』バプテスマを受けし者は即ち其死に合はんとて之を受けしなるを汝等知らざる乎」(六ノ三)

「キリストに」此のには原語にて「アイス」と云ふのである。此前置詞は方向又は範圍を示すものにして、パウロは其の眼をキリストに傾注したものである。

第六、「イエス・キリストを指して」

此の前置詞の原語は「ペリ」即ち「就いて」と云ふ言葉である。邦譯にては「其子我儕の主イエス・キリストを指して示せり。」とある。馬太傳・廿二ノ四十二には「爾曹キリストについて如何に思ふ乎」と主自ら御尋ねになつた、キリストは人か神乎、是れ二千年來の大問題である、此問の答如何によりて我等の運命は定まるのである、パウロはイエス・キリスト自身に就いて何を言うて居るか、「甦りし事によりて明かに神の子たる事顯はれたり」(羅一ノ三、四)

第七、「汝等我儕の主イエス・キリストより恩惠と平康を受けよ」(一ノ七)「より」は原語にて「アポ」といふ、此語は物の原因又は起點を示すのである。パウロはキリストを以て恩惠又は平康の原因又は起點と見た。

「我予ふる水を飲むものは永遠かわく事なし」とイエスは云ひ給うた。又ヨハネは「我儕皆彼に充滿ちたる其中より受けて恩寵に恩寵を加へらる」といつた。

パウロがイエス・キリストに冠したる以上七個の前置詞を玩味すれば、イエスに對する態度を能く伺ふことが出來るのである。願はくはこれ等に學び、パウロの如き「キリストと偕なる生活」に進まんことを。

九、恩寵の福音

神の子キリストの福音は人に努力功績を要求するのではなくして上より賜ふ救の惠であることを高調したのは我がパウロである。即ちこの道は恩寵の福音であると主張して居る今彼の書簡に據りて三つの問題を通してこの道の內容を學で見たい。

(一)信仰に由て救はるゝこと

パウロは最初の考では、律法を力行して人は義とせられ得るものとして極力之を勸めたが、遂に意外な結論に達した、それは律法に由て人は義とせられるものでない、如何に難行苦行しても、行爲に由て人は義とせられないのみならず、反つて此律法に由て罪が我身に殖えて來ることを悟つた。律法は人を罪より救はないで、反つて重荷を加へるものと解つたので之を捨てた、彼は玆に心機一轉してキリストを信ずるに由て全然救はれ、完き義人となり得られることを實驗した。イエスに由て人は救はれ、且つ其嚴しい律法まで完成し得るものと信ずるに到つた。

「汝等恩に由て救を得、これ信仰に由てなり己に由るに非ず神の賜なり」(弗二ノ八)と明言した。救は神より給はる賜物であると知るに至つて彼の生涯は新しく輝いて來たのである。

「エテオピヤ人は其膚を變へ得るか」といふことがあるが我等は何んなことをしても自分で生れ變た人間となることは出來ぬ、所謂「豹は其斑を化へ得るか」で人は自分の力でも

つて別人とは成り得ない。然し茲に唯一つの道が開かれた、パウロは之を發見し、且つ之を躬ら實驗して天下の人に宣傳した。之を告げ擴めるためには身命を獻げんと覺悟した。それは即ちキリストに由れる信仰である。「キリスト我を執へた」というて居る。「キリストの囚人となれる我」というた。愛なる神の最高自現なるキリストを信じて人は始めて救はれ、義とせられ、且つ律法を完うすると確信したのである。恩寵の福音が之である。

「今律法の外に神の人を義とし給ふことは顯はれて律法と預言者は其證をなせり」（ロマ三ノ二一—二六）

パウロは羅馬書に於て是迄痛切に罪の性質並に其結果など悲しい事件を論述し來つたが今や罪の暗黑なる方面より欣然として眼を光明界に轉じ「今」なる文字を用ひて其確實なる救濟の眞相を講解せんとした。彼は此眞理を曉鐘の如くに鳴り響かせずには居られなかつた。

其二十二節に義の出所を述べた、即ち此の義は神より出づるものであつて人の力で造るものでない。而して其の性質は行爲に由りて生れたるものでなくて、唯信仰に由りて顯は

れる義である。「信仰の父アブラハム」は唯「信仰に由て義とせられた」のである。此の義を受くる條件は信仰であつて、唯信ずる者にのみ此の義が授けられるといふのである。「人皆罪を犯せば神より榮を受くるに足らず」即ち神の前に義とせられることは出來ないが、たゞ信仰に由てのみ此一事を成就することが出來るといふのである。

第三章二十四節にパウロは三個の有益な事實を擧げた、第一は罪人が功なくして義とせられること。信は道の源といふことがあるがパウロに取りては信は生命に到る道である。「神は信ずる者を救ひ給ふ」（ロマ一ノ十六）第二、義とせらるゝ原因は「神の恩を受け」るのである。之は罪人に對する神の恩である、汝等恩に由りて救はるゝなり、」神の恩に由て義とせられるのである。第三は義とせられる手段は「唯イエス・キリストに在る贖に賴」ることである。キリストの贖は罪人を義人となし給ふのである。贖とは神の怒を避けて其恩に浴することである。ユダヤ人は贖の意義を能く解して居る、昔より神に對して人が犯したる罪の贖にとて小牛、羊又は鳩などを神に獻げて來たのであるから、贖の教は解し易い、彼は曰ふ「其義を彰はさんとてイエスを立てゝ挽回の祭物となせり」と十字架に於けるキリ

ストの死は救の一大事業を成就したのである。

第三章二十一―二六節は二大問題に分かれて居る、即ち

(一)新しき義　(二)其の義を授け給ふ方法と理由

- 新しき義
  - 一　其の原因……神
  - 二　其の律法との關係
    - イ、律法の外
    - ロ、律法と預言者とは其の證をなせり
  - 三　特質……イエス・キリストに於ける信仰
  - 四　條件……イエス・キリスりを信ずること
  - 五　範圍…「凡の人
  - 六　此の範圍の理由……「區別なし」

- 義の授與の方法と理由
  - (一)如何なる方法に由るか
    - (イ)方法……「功なくして」
    - (ロ)原因……「神の恩を受け」
    - (ハ)手段…「只イエス・キリストの贖に賴りて」
  - (二)何故にイエスの血を以てするか
    - (イ)イエスを信ずる者を義とし
    - (ロ)尙自ら義たらんがためなり

(二)救を得るは望に由る

思ふに「義とせらるゝ」と「救はるゝ」とは殆んど同意義であるけれども、此の間に輕重がある、信仰に由りて義と見做されて未だ義と成つたのではない。既に義とせられたる者が更に靈を受けて其人の靈性は日々に新になり、終に救に達するのである。即ち義は人が救はれて往く道程を含んで居つて、完全なる救に達するは一に希望に由るのである。我等の救は現在ではない、寧ろ將來を指して居るもので、玆に「我儕が救を得るは望に由れり」との眞理が實現するのである。「又受造者自ら敗壞の奴たることを脫がれ神の子の榮なる自由に入らんことを許されんとの望を有たされたり」我等は此の希望を抱いて活き且つ進むのである、希望は眞に偉大なる能力を人に與へるものである、パウロは又「我儕は時を知れり今は寢より寤むべきの時なり蓋は信仰の初より更に我儕の救は近し」といつた。サンディ博士は「基督教の獨特な希望の觀念は信者が既に其所有せるところよりも更に大なる物が彼のために蓄積せられてをることを含んで居る」と云つて居る。

救といふ文字は贖罪(主イエス・キリストの)から生ずる凡ての利益を表して居る、即ち

罪の赦、成聖と榮光に入ることゝを含で居る、「それ人の子は喪ひし者を尋ねて救はん爲めに來れり」(路十九ノ十)此の意味に於てイエスは救主である、何となれば、我等が義とせられ、又聖とせられ、又榮光を受くることを得るは全くイエス・キリストに賴るからである、救は廣狹兩樣の意味に取ることが出來る、狹い方の意味は(提多三ノ五)「唯其矜恤に循ひ更生の洗禮と聖靈に由りて新にすることを以て「我儕を救へり」、玆には救といふものが旣に完成せられて人が現在之を所有して居る樣に表されてをる。然し、救は其の廣い意味でいふと未だ完成せられずして全く將來に屬するものである、「終まで忍ぶ者は救はるべし」即ち唯希望の中に之を樂しむやうに表れて居る、言を換へていへば　救を將來に期待して居るのである、何となれば我等は未だ天國の榮光を我有として居らないからである。基督敎的希望の根柢は堅固にして確實である。即ち「神の易ふ可からざる道」と其約束とが其根柢である。此道と約束との上に、其獨子の血は其約束に印し、神の子が其父に爲したる「死に至るまで」の服從は以て此希望の根柢となつたのである。「我等が此望は靈魂の錨の如し堅固うして動かず幔の内に入る」(來六ノ十九)とある、パウロは此の希望を靈魂の錨と呼んだが、これ

は基督者が船の海上に出でゝ荒い風浪に動搖される如く、此の現代に在つて受けるところの誘惑と攻擊とを表して居る、土中に確乎と安置た錨を有するが故に決して動搖かされることがないのである。「凡そ神に由れる此望を懷く者は其潔きが如く自己を潔む」(約一三ノ三)である。使徒の言の中、「希望」は其の大部分を占めて居るが、就中パウロやペテロの如きは希望に充ち溢れた人々であつて。デール博士はパウロを「希望の使徒」と呼んで居る。この旺んなる希望に活きて居なければ、救の完成は出來ぬ、況して神の國を建設することなど覺束ないことである。

請ふロマ書第五章を劈頭として希望が如何にパウロの精神を占めて居るかに注意せられよ、「是故に我儕信仰に由て義とせられたれば神と和ぐことを得たり……且つ神の榮を望みて欣喜をなす……練達は希望を生じ希望は羞を來らせざるを知るこは我儕に賜ふ所の聖靈に由りて神の愛我儕の心に灌げばなり」(五ノ一—五)と、僅かに此五節の中に含んで居る信仰と慰安とはまことに深遠な且つ多樣な意味を有て居つて、測り難く悟り難いものである。基督者の享有すべき平和……歡喜……勝利……は集まつて悉く此數節に潛んで居る。而して

基督者の調節器とも稱すべき三綱も亦此處に存する。即ち信仰と希望と愛とがある希望は基督者が此世を渡る際に於て彼を慰め、彼を助け、將來彼に顯るべき榮光に於て、約束せられたる祝福を俟望ましめる。希望は即ち信者をして此の浪風の荒い、患難の多い世界を安全に渡らしめるための堅固にして搖かざる靈魂の錨となるのである。

(三) 恩寵の福音

パウロは自分の罪惡の深刻なるを、悟れば悟るほど恩寵の豐富なることを認めて、感恩の念に滿ち溢れて來るのである。渾身の勇氣を以て主恩の渥きに報ゆることあらんと決心し「我は負へるところあり」と告白するに至つた。

「我れ此の如くなるを得しは神の恩に由りてなり我に賜ひし神の恩は徒然からず我は衆の使徒よりも多く勞めたり此は我にあらず我と偕に在る神の恩也」(哥前十五ノ十)

パウロは此の句において「神の恩」「我に賜ひし神の恩」又は「我と偕に在る神の恩」と繰返し〳〵述べたるを見ても、彼が如何に深く神の恩を感じて居つたかゞ解る。

今ロマ書に於てパウロは如何に惠の意義を高調して居るかを見んに、

(一) 「我儕彼(死より甦れる神の子イエス)より恩惠と使徒の職を受く」(一ノ五)

(二) 「我儕の父なる神及主イエス・キリストより恩惠と平康を受く」(一ノ七)

我譯にては前の「彼より」は惠を受くる手段にて彼を通しての意味であり、後の「キリストより」は主を以て恩惠の源因と見るのである。ヨハネの言を以ていへば「我儕皆彼に充滿ちたる其中より受けて恩寵に恩寵を加へらる」であるやうに、キリストは恩惠の源であり、汲めども盡きぬ泉である。即ち此の「より」は原語にては原因を示すものと見てよいのである。イエスは嘗て次のやうに曰はれた。

「人もし渴かば我に來りて飮め我を信ずる者は其腹より活ける水川の如くに流出づべし」(約七ノ三七、三八)

パウロは自分が主より受けて居る恩惠を何うかして他の人々にも受けしめたいものと思つて居つた、獨り私するのは罪であると思つて極力此の一事を努めた。「我汝等を見んことを深く願ふは汝等を堅固うせん爲に靈の賜(賜は原語恩惠より來る靈の恩惠と譯してよい)を予へんと欲へば也」(一ノ十一)といつて深くも他人の魂を案じて居る。イエス・キリストに

於て充滿たる其中より豐かに恩惠を受けよと心中に願つて居つた。

我等が傳道をするのも其第一要義は、自分等が受けて居る靈の賜を他人にも分與へることであると感ぜざるを得ぬ、眞に主恩に感激して居るならば、誰でもパウロと共に「我れ道を傳へざれば禍なり」と云ふに至るべきである。賜の原語は恩惠の賜であつて人が自力や行爲で得られない恩惠である、此の文字は新約書中パウロに依て最も盛んに使はれた語である。宜なるかな、これは神の恩寵の經綸であつて、罪人が之に由て罪より赦され滅亡を免るゝのみならず、更に永遠の生命を與へられて神と偕なる祝福の生涯を送ることが出來るに至るのである。ロマ書第五章に於て彼は强く罪と惠とに就て論じて居る、特に溢るゝ恩寵を絶呼して「恩も愈增る」と述べて居る。彼は此の恩寵の裡に生活し、活動し、其の一生を貫いたのである。

「我は我が往くべき路程と主イエスより受けし職即ち神の恩の福音を證することを遂げん爲には我が生命をも重んぜざるなり」

と宣言して勇往邁進し、萬夫不當の血戰を敢てしたのである。熱火の如きこの信仰と兄弟

を懐ふ愛とを以て其救世の大事業を成就したのである。

十、パウロの永生觀

「耐忍て善を行ひ榮光と尊貴と不朽壞とを求むる者には永生をもて報ん」（ロマ書二ノ七）

「靈の事を念ふは生なり安なり」（同八ノ六）

「神の賜は我儕の主イエス・キリストに於て賜はる永生なり」（同六ノ二三）

「我れ限りなき生命を嗣がんためには何を行すべきか」とは人類が此世に造られて以來何人の心にも潜んでをる大なる疑問である。哲學者も宗教家も之を說明せんと努めて未た完全の域に達したものはないのである。

生命は何人も之を欲するものであるから、眞に活きる道を示す信仰の言には、世の人々はもつと熱い心を傾けなければならぬ筈である、人をして死なざらしむる永生の道が玆に示されてをるではないか。ヨハネ傳は「生命の福音書」と稱すべきであるが、其書の卷頭にヨハネの基督觀を述べて居る「之に生あり此生は人の光なり」（一ノ四）と又キリストの

祈を錄して曰ふ「永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣はしゝイエス・キリストを識る是れなり」(十七ノ三)と之れ實に二千年間人の心を慰め又活かした生命の言である。然し、余は今羅馬書に顯れてをるパウロの生命論に就て其一端を窺はんとするのである。

(一)義人は信仰に由て生くべし(一ノ十七)

パウロは信仰の立場から萬事を觀て居る人であるが、如何にも生命と信仰とは密接な關係を有つて居る．此句を見ても生命は信仰に基て居る、即ち信仰は人が生命に入る第一の要路なのである。

元來ユダヤ人が懸命になつて此生命を求めても得なかつたのは、信仰の道に由らずに行爲の道に由つたからである。却て異邦人が生命に入つたのは全く此の信仰に由れる義を求めたからである。(十ノ卅一—卅二)

生くることは神に於ける確信と關係を有つて居るから、永生を得んとせば當然信仰に於て大きくならねばならぬ．人は其の有て居る信仰だけの生命を握つて居るのである。

(二)「耐忍びて善を行ひ榮光と尊貴と不朽壞とを求むる者には永生を以て報ん」(二ノ七)

「求むる」といふことは永生に入る要件の大切なる一事である．求むる心なき者はそれ以上の賜物を受けることは出來ないのである。

(イ)先づ求めよ、「求めよ」とは主イエスが數々宣べられた語である「先神の國と其義とを求めよ然らば此等のものは皆汝等に加へらるべし」といはれ、又「凡て求むる者は得尋ぬる者はあひ門を叩く者は開かるべし」ともいはれた、求むるも尋ぬるも、門を叩くも、心は同じことで、切なる要求を示されたものである、「爾曹のうち誰れか其子パンを求めんに石を予へん乎また魚を求めんに蛇を予へんや……況して天に在す爾曹の父は求むるものに善き物を予へざらんや」(太七ノ七—十一)とあるが，主の教訓には此の求むる心と予ふる心とが面白い關係を以て表されて居る、パウロは此理を推して「榮光と尊貴と不朽壞とを求むる者には永生を以て報ん」との確信を述べて居る。これは自らの實驗を告白したのである、即ち斯くの如き人々は新なる力が加へられ、新生命が予へられて、走れども勞れず、歩めども倦まざるに至るのである。(イザヤ四〇)

(ロ)何を求むべきか、心を傾けて求むべきは榮光と尊貴と不朽壞とである、此等は天地創

造の主なる天父の性質の三要素である。此等の諸德は主が我儕の求むべきものとして敎へられたる祈禱の目的物である、かかる高潔な寶に向て心を傾けて願ふときは、神は喜で永生をも惠與し給ふのである。

（六）如何なる態度を以て求むべきか、求むる者は其の與へらるべきものに適はしき心の態度が要る、パウロは「耐忍びて善を行ひ」といふ、忍ぶ者は最後の勝利を得るとの格言があるが、耐忍びて善を行ふことは之れ最善の態度である。「耐忍」の原語はヒユポ（下）メノー（留）の二字より成りて、下に留まるの意である、萬難に堪へる勇氣を示すものである。即ちキリストに在る信仰を固く保ちて凡ての誘惑と困難とに耐へて永生に與かるのである「終りまで忍ぶものは救はるべし」と主は敎へ給うた

踏まれても根づよく忍べ道芝の
　やがて花咲く春は來ぬべし

クリスチャンの生涯は、患難の生涯であるから、從つて大に耐忍ぶ精神を養はなければならぬ。ロマ書はパウロの經驗錄であるが、其の中に數々此事を述べて居る「患難は忍耐を

生ず」「忍びて之を待つべし」「望みて喜び患難に耐へよ」と奬勵を與へて居る。

（三）死にし者に生命を予ふ、死にし者を活かすといふアブラハムの信仰をパウロは高調した、起死回生の道は唯神の中に存するものである。（四ノ十七）「それ我儕は彼に賴て生き動きまた存ることを得るなり」（行一七ノ二八）死にし者を起して生命を造る神は生命の作者である。「我儕は神の造り給へる者なり」（弗二ノ十）と彼は言うて居る、此の「造り給へる者」は原語では神の造りたまへる詩歌のことである、神は死にし者を起たせたまふ權能ありと固く信ずることは永生の源である。

（四）「若し我儕敵たりし時に其子の死に由りて神に和ぐことを得たらんには況して今其生るに賴りて救はるゝことを得ざらんや」（五ノ十、五ノ九、十五、十七、二十）我儕弱かりし時。我儕不虔者たりし時。我儕罪人たりし時、キリストは我儕のために死にたまうた、況して和ぎて得たる今其生るくる賴て救はるゝことを得ざらんやである。本章に於ては一人のアダムの罪に由て死が人類に及んだことゝ、一人のイエスに由て獲られる

恩惠は多くの人に溢れざるを得ないといふ深き事實が說明せられてをる。キリストに於て顯れる恩惠は溢るゝばかりであることを示すために「況して」なる語は五回も使はれてをる。「恩も愈增る」のである。我儕はキリストに賴て生命を獲(五ノ十八)又永生に至る(五ノ二一)のである「況して溢るゝ恩と義の賜を受くるものは一人のイエス・キリストに由り生に在りて王たらざらんや」(五ノ十七)であつて、啻に生命を獲るのみならず、生に在て王者たるのである。これ實に無量の特權である。是に於て人は其の天父より賦與せられたる萬物統治の大權あることを自任し得るのである。我儕の足は地に着いて其首は天に向つて居る、即ち一半は地の子にて、他の一半は天の子である。人は王者の資格を有するもので、神は之に榮光と尊貴とを與へ給ふのみならず、領地と服從者をも賜はる、萬物は皆其の足下に屬するであらう「最後に滅さるゝ敵は死」である(創一ノ二六)

(五)父は人のために永生を備へ給ふ、

是れパウロの確信であつて、人は其の永生を獲んためには、

(イ)罪との關係を絕たなければならぬ、此世と妥協し、罪の世渡りをして居りながら永生を得ることは出來ぬ。

(ロ)神の僕となつて、神に服事ねばならぬ、我儕は神の者即ち神に屬するものとならねばならぬ、そこで

(ハ)聖潔に至るの果を得ると言つて居る、而して終に

(ニ)其終りは永生となるのである、是れパウロが永生を得るに至るまでの道順を示したものである。

『罪より釋されて神の僕となりたれば聖潔に至るの果を得たり且つ其終は永生なり、罪の價は死なり神の賜は我儕の主イエス・キリストに於て賜はる永生なり』(ロマ六ノ二二、二三)

永生は兵士が受くる給料のやうなものではなく、神の賜である。而して之は我儕の主イエス・キリストに於て賜はるのである、罪より離れて人は自由を得潔められて永生に至るのである。

(六)「我儕が其の死に合ふバプテスマに由て彼と同に葬らるゝはキリスト父の榮に由て死より甦されし如く我儕も新らしき生命に行むべき爲なり」(六ノ四)

パウロは生命を論ずる時には多くは死といふことを先きに置く。死を經て生命を獲るの順序である、即ち本文に見えるやうに先づ葬られ、甦らされて、新生命を受けるのである、新生命を受けたる者は「行む」のである、即ち新らしき天地に生活するやうになるのである、クリスチャンは一旦死んで甦つた永生の所有主である、舊生涯は弊衣の如くに去るのである、「若我儕彼の死の狀に等しからば亦彼の復生にも等しかるべし」(ロマ六ノ五)「等し」は「接合」の意にて我等の生命は此時からキリストの生命に接合したものである、「永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣はしゝイエス・キリストを識る是れなり」とヨハネ傳には錄されてある。

「人キリストに在るときは新に造られたるなり舊きは去りて皆新しく作るなり」にて眞に新天新地の生活である「我が來るは羊をして生を得且豐かならしめんが爲めなり」と主は告げたまうた。

接木するには青い若い生々としたものでなければならぬやうに、キリストと接合するには、若い生命の人でなければならぬ。ジョウエット牧師は其の「靈的變化」といふ題の下にキ

リストが如何に我等を聖化し給ふかを述べて居る。聖書はイザヤ二ノ四「斯くて彼等はその劍をうちかへて鋤となし其の槍を打ち變へて鎌となすべし」といふを引き『我儕の主イエス・キリストは決して我儕の力を縮少なさらぬ、彼の許に持て行けば如何なる力をも保存する、それを轉化し榮光に變へて保たれる「新しき人」は「古き人」の凡ての力を有て居る、イエスは我が劍を取つて之を鋤となして我に返し我槍を取つて之を鎌となして返し給ふ』と敎へてをる。古きは去りて皆新しくするキリストの力は偉大ではないか。

(七)靈の事を念ふは生なり安なり(八ノ六)

傳道の書の中に「神は我儕に永遠をおもふ念を與へ給へり」とあるが「念ふ」の原語は「心に保留る」又「心に銘ずる」といふ强い意味である。「生」又は「生くる」といふ文字はロマ書八章中に五回も使はれて居る。

「活す」即ち生命を予ふる靈の法はイエス・キリストに由て罪と死との法より我を釋すのである、(八ノ二)靈の權威は死を亡して人に生命を予ふるのである。

彼は又神の靈は我儕の衷に住む(八ノ九)(十一)と言ふ、神の靈とキリストとは同一であつて、キリ

ストが我が裏に住みたまふ時に、彼の義に由て我靈魂は生きる、即ち我靈魂は生命を獲るのである。「それなんぢらに住むところの靈を以て汝等が死ぬべき身體をも生すべし」「若し聖靈に由て身體の行爲を滅さば生くべし」（八ノ十二、十三）生る唯一の方法は聖靈を我が裏に常住せしむることである、故に彼は靈の事を念ふは生なり安なりというたのである。

ペテロが尙キリストの心を察することが出來ずに主を諫めんとした時、主は深くペテロを戒め給うたことがある、「サタンよ我後に退け爾は神の事を思はず反て人の事を念ふ」（可八ノ三三）といひたまうた。人の品性は其の心に思ふところに由て造らるゝものである、我儕は常に心の裏に誰の事を思うて居るか・生と安との道か、將た亡と死との道か、顧みねばならぬ。

或處にうら若き婦人が居つたが、其品性が氣高いので有名であつた、彼女は其頸に小金盒（肖像頭髮等を入れるもの）を懸けて居たが、誰一人其中を見た者がなかつた。一日其の親友が之を見ることを許されて開けて見ると・次の語が發見された「見ざれども之を愛し今見ざれども信じて喜ぶ」とあつた・これこそ彼女の善き品性の秘密であつた、彼女は聖

書にある通り、いつしか「其の同じ像」に化せられて居たのである。

（八）若し聖靈に由て身體の行爲を滅さば生くべし、「靈を以て」とする方原語の意に近い、意志の力で抑へても全く之を滅することは出來ぬ、人は誰にても神の靈の感化に由らなければ其心の敗壞に勝つことは出來ぬ。神の靈の力は太陽が堅氷を溶かすやうに罪の力を亡すのである・我儕眞に生きんとするには、神の此の靈を以て身體の行爲を滅さなければならぬ。

キリストは生命の原因であるから、ヨハネの錄したやうに、「神の子を有つ者は生命を有つ」ものである、自らの力に由らず、キリストの靈に由てゞある。永生を得るの途は之より外にないのである。

昔使徒達に働きたまうた神は、今も尙我儕の裏に住みて働きたまうのである、金森通倫氏が永遠の世界を思うて信仰の態度が改まり、爾來各地に盛んなる靈的活動をして居る如きは、全くこの靈の力に由ると思はれる。信仰生活は斯かる高遠なる理想を心に抱くところから出發して、眞の善事を計劃するに至るのである。

十一、パウロの最高の理想なる神の子

東京に於て近頃行はれて居る協同傳道新聞傳道中に、植村正久氏は「人生と基督」てふ深遠にして高大なる論文を掲げてをる、其の心血を吐かれた一節は予の心に強く泌み渡て居るから、予は今其の言葉の味を多くの人に頒ちたく思ふ。

「神は在天の父である、神の家における如く、世に住み、其子たるの分際に安んじ、孝道を旨とし、之を樂みて祝福圓滿なるが人の理想である、然れどもキリストの外何人も我こそ神の子なれと名乘り出る者一個も無い。多くは神を知らず、之を念頭に留めず、己が腹を神とし、世の事に沒頭して、全く神の家を外にする境界に沈淪して居る。斯かる中に獨りイエスが神の子である。我等の如く、或は神と成り得ず、或は然か成り損ね、或は然かならんとし、或は辛うじて然か成りたる者の、未だ子として眞に其身を立つるに至らざる如きとは全然異なりて、彼は初めより神の子である其本來の子である。然か成りたるに非ず、素より然かありしものである。ナザレのイエスは神の獨一の嫡子であ

る。之に由る者のみ神の子たることが出來る云々」

今熟々羅馬書を探究するに、パウロの最高理想とするところは、神の子イエス・キリストに傚ひ、以て我等神の子たることを實現するにあつたのである。

（一）パウロ最高の理想なる神の子

パウロはイエス・キリストを指して「其子」といつた。如何にも神人間に於ける親子の愛情を彰した語である。第八章には「子」なる語が三回出で居る。「己の子」（三節）「其の子」（二九節）「己の子」（三二節）之等を直譯すれば「其生みの子」即ち神が其血を分けたまへる子といふ意味になる。

神はキリストを以て到る處に我が子たることを彰し給うた。「爾は我愛子我が悦ぶ所の者なり」と、之れ神御自身の證明である、人は之を信じなくとも、神は自ら之を證して居られたのである。又キリストは能く天父を識り、終始孝道を以て其の一生を貫いて居られた。少年の時に於て既に「何故我を尋ぬるや我は我父の事を務むべきを知らざるか」といはれたるを見ても、神の子としての意識は明かに有つて居られたのである。而してイエスは臨終に

當りて天日暗み來りし場合にも尙其の心に在りしは唯在天の父のみであつた。「父よ我靈を爾の手に託く」と、イエスは實に終生其父の子としての生活を全うせられたのである。「父の外に子を識る者なく又子及子の顯はす所の者の外に父を識る者なし」とのイエスの語は、彼の一生涯を識りて始めて味ふことの出來るものである。

我等は本來「怒の子」である。即ち肉に由て生れたものである。神の子なるイエスに由らなければ神の子となることは出來ぬ。修養も、苦行も、終に「血肉は神の國を嗣ぐことが出來ない」のである。然るに「我は途なり眞なり生命なり人若し我に由らざれば父の所に往くこと能はず」といひたまへるイエスに由るならば、如何なる人でも神の子として迎へらるゝことが出來るとは何たる難有き福音であらう。

高橋箒庵氏の東都茶會記に面白い記事があつた、

「先般月向和尙が上京中救世軍敎會所の前を過ぎて、片隅に休息しつゝ說敎を聽き居たるに、部下の少尉中尉など云へる面々スワ道場破りこそ御參なれと思ひ僻めて、和尙を取卷きつゝ様々に揶揄し、果ては講壇に在りし會主さへ出で來りて、御身の如き雲水の

身と爲り居らんよりも寧ろイエスの子となりては如何と勸めければ、和尙は其の會主に向て偖は貴所がイエス・キリストなるかと問ひたるに、會主答へて、否とよ我も亦イエス・キリストの子なりと云ふ。是に於て和尙、されば愚僧も其のイエス・キリストの子となるべければ、願くは其の父なるキリストを此處に呼び來られよ、愚僧は彼と相談の上其子となるや否やを決せんと言ひしに、會主は語塞がりたる樣子なれば、匆々其場を立ち去りたり云々」

これは頗る面白い話であるが、我等はキリストに由らざれば、決して父に來ること能はず、蓋し「子の顯す所の者の外に父を識る者無し」であるからである。「それ道肉體となりて我儕の間に寄れり」とヨハネは云つてをる。

（二）人は子となるべく造られたる者

我等は生れて子たるものではない、子となるべきものである。「アバ父と呼ぶ子たる者の靈なり」とある。「子たる者」は英語の adoption であつて、新約聖書に於ては五回用ひられてをる原語に依れば、「子」と「成る」との二語より成立て居る。「子たる者の靈」なりと福音

を解して實に祝福の頂點に達したものである。パウロの福音の中心は實に此子たる者となるといふ點であつた。

一、アバ父と呼ぶ子たる者の靈なり（八ノ十五）
二、我儕自ら歎きて子と成らんこと…を俟つ（八ノ二三）
三、彼等はイスラエルの人たり神の子たる事（九ノ四）
四、神其子の靈を爾曹の心に遣りアバ父と呼ばしむ（加四ノ六）
九、其意のまゝにイエス・キリストに由りて我儕を己の子と爲さんことを愛を以て預め定めたり（弗一ノ五）

聖靈は「子たる者の靈」と呼ばれる、神は聖靈に由りて我儕を其子と爲したまふ故であらう。又は聖靈を以て我等を子とする質となすか又は印となす故であらう。奴たる者の靈に反して子たる者の靈は、心の中に神と和ぐことを得、神に對する愛、聖、潔の情、罪を憎み、良心の平安を生ずる等凡て之等はイエス・キリストに於て神の愛の知識に賴りて得るのである。我等生れながらにしてサタンの子であつたものが、今や神の家族に取入れられ

た、我等はイエスに結付くことに由て神との交際に入つたのである。既に父の子となれば此の名稱は永久的であり、此の性質は不朽であつて、且つ神聖なものである。怒りの子が赦されて神の子となり、神を父と呼ぶことが出來る。アダプションはゼネレーション即ち再生と稱すべきものである。聖靈に由て新生命を呼吸する者となるからである。新なる誕生である（哥後五ノ十七、弗三ノ十）而して此の再生者を育て養ふところのものは唯神あるのみである。神に由て生れたる者は神の如くに變化して行く、神の性質を享けるは勿論のこと更に神の聖心を心とする者になるのである。即ち神の子となつた以上は神の世嗣となるのである。「己の子を惜まずして我儕衆の爲めに之を付せる者は豈彼に併へて萬物をも我儕に賜はざらんや」とある。パウロが謂ふ所の「神の子」は重に「自由」といふ思想を表し、ヨハネのそれは「愛」を示して居る。即ちパウロの考に依れば、神の子となることは罪の束縛より解放されて自由の天地、然かも神の無限の愛に包まれる自由の住家に入つたことになるのである。舊約聖書に言ふ所の「神の民」は、神に特別に愛せられたる者（賽卅ノ一）であるが、パウロの「神の子」は、凡て神の靈に由て魂を入れられた者といふので、其神との關係は特

別親密なものになつて來るのである。(ロマ八ノ十五)

彼を接け其名を信ぜし者には權を賜ひて之を神の子となせり(約一ノ十二)

爾曹視よ我儕稱へられて神の子たることを得これ父の我儕に賜ふ何等の愛ぞ(約一三ノ一)

神の子とせられて人は始めて最高至大の祝福を得たものである。利休の讃に曰ふ「釋迦は人を佛にし、孔子は人を仁にす、大膽なる哉利休は人を茶にす」と面白い語ではないか。我儕キリストと偕に在らば如何、小なるキリストとせらるゝこと無論のことである。

（三）其子の狀に傚ふ

余は詩人ブラウニングと共に言はん「人の創造られたるは成長せんがためにして中途に止まるべきにあらず」とパウロも亦曰ふ「それ神は預め知りたまふ所の者を其子の狀に傚はせんと之を定む……又預め定めたる所の者は之を召き召きたる者は之を義とし義としたる者は之に榮を賜へり」(ロマ八ノ二九、三〇)と愈々進で已まざるは神の子の生涯の實現である。

パウロ終生の大目的は實に人を導いて神の子たることを實現せしめんとしたことにあつた彼は之がために祈り、戰ひ、歎き、苦んだのである、人が進で神の子と成るはこれ救の目

的である。彼の神學も傳道も均しく唯此一事に集注した。ロマ八ノ十四——三〇の如きは彼が其の最高の熱度を發表したものでなる。

彼は好んで「我が福音」(ロマ二ノ十六、十六ノ二五)と告げて居るが、果して彼の福音があるとすれば、それは確かに此處は現はれて居たものに相違ない。人は神の子となりて始めて「內なる人は日々に新にせられ」其靈を愈々受けて其の同じ像に化り行くのである。

我等が既に神の子となつた曉には、自分や他人が之を認めるやうになる許りではない「聖靈自ら我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す」るのである。聖靈の證明するところとなりて其人は眞に神の子となつたのである。

パウロは更に步を進めて曰ふ「我儕若し子たらば即ち神の後嗣たるなり」と是れ大なる特權といはねばならぬ、此の名譽ある地位に撰ばれた身の光榮は窮りなきものである。

「預め之を定む」とあるが、何に之を定めるかといふに、それは「其子の狀に傚はせん」ため即ち彼等の形に於て其子の狀を顯すために之を定め給うたのである。又預め定めたる所の者は之を召き召きたる者は之を義とし義としたる者は之に榮を賜へり」といふに至つ

てパウロの神學が玆に總括されて居る。之をサンデイ博士は救の向上的階段と名づけた。基督者の生涯の道行を示されたものゝやうに見えるのである。而してパウロが之を見るのは、人の撰擇や願望の方面より見ることなく、唯天父が人類に對する注意と召命との方面より見たのである。

神の子となる途如何、それは「神がその生み給へる獨子」なるイエス・キリストを信じ、己を虛うして彼を迎へ、凡て救主に由て神の子となることが出來るのである。「キリストの狀成る」の日はパウロと共に「最早我れ生るに非ずキリスト我に在りて生くるなりと」曰ふことが出來る。

神の子となることは是れ實に福音の中心であり、人生の最高目的であり、萬民の爲に設けられある光榮の地位である。人は此道を聽いて夕に死すとも可なりである。我等は皆同じく神の子を信じ、之を知り、全人すなはちキリストの滿ち足るほどに成るまで至るべきである。

十二、神の選良パウロ

彼は我名を擔はしめん爲に我選し器也、（行、九ノ一五）

（一）パウロ遂にイエスに執はる。

基督教會の殉教者なる英雄ステパノが迫害を蒙るや、彼祈りていふ、「主イエスよ、我靈魂を納けたまへ」と。また跪いて大聲に祈りて、「主よ、此罪を彼等に負はしむる勿れ」といつたとあるが、オーガスチンは此の記事に就いて「基督教はステパノの祈禱に由つて起つた」と言つて居る。

パウロは其の當時まだ青年であつたが、ステパノを迫害する者の衣服の番をして居つて、「彼の殺されしを好し」と見てゐたのである。後年に至つて益々基督教を惡み、其の信徒に對して大なる迫害を試みた。エルサレムの教會を荒して尙倦かず、進んで北の方ダマスコの町を志し、殺氣を帶びて走つた。然るに其の途上に於て、彼は天來の主の御聲を聞いた。（行ノ九）「サウロ、サウロ、何故我を窘迫や……我は汝が窘迫ところのイエスなり爾荊

ある鞭を蹴るは難し」と、此の聲は實に彼の魂の底にまで響き渡つた。彼は地上に倒れて殆ど爲す所を知らなかつた。其の時彼の心機は一轉して、全く別人となつた。即ち新生涯に入つてキリストの僕となつたのである。「往けよ、彼は異邦人および王とイスラエルの子孫の前に我名を擔しめん爲に我選し器なり。彼は我名の爲に如何ばかりの苦難を受るか我これを彼に示さん」と主はアナニヤにいひ給うた。今やサウロにはキリストの名を擔うて起つべき時が來た。「其名の爲に萬國の人々をして信仰の道に從はせんと」（ロマ書一ノ五）の雄志を抱いて西歐の天地に活躍する時が來たのである。

彼を執へたまうたはキリストである。「我母の胎を出し時より我を簡びおき恩をもて我を召給ひし神、其子を異邦人の中に宣しめんがため心に善として彼を我心に示し給へる其時われ直に血肉と謀ることをせず、また我より先に使徒と作てエルサレムに在るところの者にも往ずアラビヤに往きまたダマスコに返れり」（加一ノ一五—一七）と、自ら述べて其の生涯の事業は決して自ら決したるにあらず、また自ら選びたるにあらずして、全く上より執へられたることを確信して居つたのである。羅馬書第九章より第十一章に至るあの選定の意義は彼

にして始めて宣言することを得るのである。我は何人なるか、我何を爲すべきか、我何か識り得る、我何處に往くべき、の四問は人の生涯中一度は必ず自答せねばならぬ問題であるとはカントの言であるといはれて居るが、パウロはダコスコ途上にて、「主よ、我に何を行しめんと爲給ふや」との問を發し、續いて主の聲を聞いて彼が半生の夢は破られたのである。彼、玆に更生の人となり、第二の誕生を實驗して神の選良となつたのである。

（二）パウロは自ら彼を求めず、飽くまで彼に抗せり。

パウロがキリストの僕となつたのは自ら求めてのことではなかつた。否、初は大に反抗を試みたのである。キリストの教會を地上から取除かんことは彼の畢生の望であつたので、獅子の荒れたる如くに突撃したのである。されど「爾荊ある鞭を蹴るは難し」との主の聲を聞いて其の目的は一變せざるを得なかつた。キリストの誰なるかを知り、自らの何者なるかを悟つた時に、彼が以前の生活の徒勞であつたことに氣が附いた。「人は企劃し神は處理す」とは此事であつた。「我思は汝等の思と異り、我道は汝等の道と異れり、我道は汝等の道よりも高く、我思は汝等の思よりも高し」とイザヤ書に錄されてある。彼がダマ

スコ途上にて主の聲に接し、主と物語り、主に導かれて心魂一轉し、新しき希望は彼の前途に輝き初めたのである。

パウロ生れざりしならば、又彼がエルサレムよりダマスコに行く途上幻を見ざりせば、基督教の思想及教會の道は如何に異り居りしぞ、とはゼームス、ブライスの言であるが、パウロは「我名を擔はしめん爲に我選し器也」との天來の大使命を成就し、以てキリストの道を固め、彼の福音を滿天下に布いたものである。而も其の轉機たるや實に一瞬時であつた。開閉器一轉して電光一時に四隣を照らすにも似て居る。彼の心が神に觸れた刹那に於ける神の働きである。禪語にいふ、「一華開けば天下皆春なり、一度發心すれば法界悉く道なり」の妙諦である。後年自ら錄して、「あゝ神の智と識の富は深き哉、其法度は測り難く、其蹤跡は索ね難し」と絶叫したのは無理のないことである。神の恩寵は求めずして上より與へられたのである。これが賜物といふのである。

(三)神の人に對する態度。行に由らず、召に由る。

神は其の大經綸を行はんが爲には人を要し給ふのである。人は神の榮光を顯すために召

され、福音の證人として選ばれるのである。之を定め給ふ神の權威は絶對無上のものであつて、人が求めて之を得られない。辭して其任を避けられない。神は全能であり、全知であり、又人の運命を司り給ふからである。「其子未だ生れず、又善惡を行さゞれど、神の選びたまひし聖旨は變ることなく、行に由らで、召に由つて彰はさん」(羅、九ノ一一)とあるが、本文に「選」と「召」との二字があり、又二十五節には「稱」へとあるが、原文は「召」といふ字に等しい。即ち「我儕召されし所の者は第ユダヤ人のみならず、亦異邦人の中よりも召されたり、我ば我民ならざりし者を我民と稱へ、愛せざりし者を愛する者と稱へん」(九ノ二四—二五)とある。神は自らの意志のみを以て人を選びたまふ。人の力や行爲を以て其の選擇の標準とせられたならば、神の事業は到底當にならぬ浮沈定りなきものとなつて仕舞ふであらう。パウロは救の原因を惟神のみに發見した。

神は一つの希望を有つて居られる。即ち救はんとの聖旨である。此の聖旨は決して廢るべきでない、必ず成就せられる。此の目的を貫くには選定に由り給ふ。而して其の選定に與る者は先づ約束に由る。其の目的を成就し給ふには人の行爲を以て決定されない。唯之

が選定をなされる神自身に由るのである。「變ることなき」の原語は「メノー」即ち「留まる」又は「永遠に殘る」を意味する。これ神の御事業は永遠に續くべきものなるを含んで居るのである。英譯には「立つ」とあつて飽くまでも倒れない意である。常に立つて居るのである。神の御事業は人の變遷、世の轉變に由つて些の變化をも蒙らないのである。絕えず進み行き、凡てのことに勝利を占めて居るのである。パウロはイザヤの言を引いて曰ふ、「神は義を以て其言を斷、之を成竟るべし、蓋さだめ給ふところの事は主は速かに此地に行ふ可ければなり」と。又曰ふ、「然らば願ふ者にも趨る者にも由らず惟めぐむ所の神に由れり」（羅九ノ一五ー二八）と。彼の言葉を味はゞ救は人の願ふに由らずして、上より來る恩惠なるを知ることが出來る。神は永遠に恩寵の神に在すといふのがパウロの信仰の眞髓である。「智者安くにある、學者安くにある…、神は世の愚者を選び、世の弱者を選び…また神は有る者を滅さんとて、世の賤者藐視らるゝもの即ち無が如き者を選び給へり」（コリント前一ノ二〇ー）とまで宣言した。

（四）神の權能と自由。

パウロの神は權能の神である。萬事を其の意のまゝに自由に處理し給ふ方である。「神若し其能力を示さん爲に滅亡に備れる器を永く耐忍ことをなし、また榮光に預め備し矜恤の器に其榮の豐盛なるを示さんとせば我儕何の言こと有んや」（羅、九ノ二二ー）と言つて世には二種の器のあることを述べて居る。（一）滅亡に備れる怒の器と、（二）榮光に預め備へし矜恤の器とである。

「肉に由て子たる者これらは神の子たるにあらず惟約束に由て子たる者は其苗裔とせらるゝ也」（羅、九ノ八）（羅、八ノ一四ー一六、參照）アブラハムの苗裔たるの故を以て人は神に對する新地位を得る事は出來ない。「斯かる人は血脈に由るにあらず情慾に由に非ず人の意に由に非ず惟神に由て生れし也」とヨハネが謂つたのは是れである。「工を作ものの價は恩と稱ず受べきものなり。されど工なき者も不義なる者を義とする神を信じて其信仰を義と爲れたり、工なく神に義とせらるゝ者の福なることは正にダビデが言る如し、云く其不法を兗され其罪を蔽はるゝ者は福なり…」（羅、四ノ四ー）と彼が述べたのは、神を自由なる然も愛の權能者と認めた證とも言ふべきである。彼は斯かる神に選ばれたのである。從つて自覺せる其の權能と責任と

は、絶大無限なること言を俟たぬのである。彼は世人が造られし者よりも造りし者を低く見る本末顚倒の見を排して、惟大能ある權威の神の選定に服從したのであるあ。

（五）召され、選ばれて救に入る。

「我儕神を愛するに非ず神先づ我儕を愛し給へり」とは實に基督敎の神觀である。救はれて召され選ばるゝのではない。召され選ばれて然る後に救はるゝのである。ダマスコ途上のパウロは即ちそれである。「神は其生みたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずる者に亡ること無して永生を受しめんが爲なり」（ヨハネ、三ノ一六）で我等が神を愛するのは、神が先づ我等を愛し給ふ其の謝恩の心に基づくのである。神よ我が信なきを助け給へと日頃祈るべきである。

「我儕の知識全からず」「われ願ふ所の善は之を行はず」とある通りにて、人は微力不完の者であるにも拘はらず、神は「其獨子を賜ふほどに世の人を愛したまふ」とは何たる恩寵の福音であらう。亡ぶべき者が救はれると聞いて誰か其大赦の恩召を忘れることが出來よう。而もそれが「預め知り給ふところの民を棄て給はぬ」（羅、一一ノ二）とあるに至つて、誰か天父の愛を感謝せぬ者があらう。昔エリリヤ失望して我一人のみ遺されあるを神に訴へしに、神は「われ自己の爲にバアルに跪づかざる者七千人を存せり」と（羅、一一ノ四）言はれた。神は人の知らざるところに多くの選良を存し置きたまふのである。基督者は決して孤軍奮闘ではないのである。

信者とは神の選者である。即ち神に選ばれて救に與つた者のことである。左にパウロの言を引いて本文を結ぶ。

「召されて使徒となり神の福音の爲に選る」。（羅、一ノ一）

「人よりに非ず又人に由ずイエス・キリストと彼を死より甦らしゝ父なる神に由て立てられたる使徒パウロ」（ガラテヤ、一ノ一）

パウロの人物と信仰 **終**

大正六年五月二十四日印刷
大正六年五月二十七日發行

定價金五拾錢

不許複製

著者　梶原長八郎

發行者　東京市京橋區明石町八番地
基督教興文協會代表者
エス、エチ、ウエンライト

印刷者　橫濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

印刷所　東京市京橋區銀座四丁目一番地
福音印刷株式會社

發行所　東京市京橋區明石町八番地
日本基督教興文協會

發賣所　教文館・警醒社・丸善書店・岩波書店
基督教書類會社

25

325
602

終